

ウェルギリウスの「詩選」第2歌　：　第一部（序論）解釈の動向

著者	中山 恒夫
雑誌名	文藝言語研究．文藝篇
巻	19
ページ	1-15
発行年	1991-03-01
その他のタイトル	De Vergilii ecloga secunda : I. Prooemium Motus interpretationum
URL	http://hdl.handle.net/2241/13713

ウェルギリウスの『詩選』第2歌

——第一部（序論）：解釈の動向——

中山恒夫

1. 牧歌の謎

ウェルギリウスの牧歌は謎である。詩人は、あたかも彼自身が『農耕詩』第4巻で描いたプロテウスのように、千変万化で、全く捕らえ難い。「ローマ文学の最も難しい詩の一つである」という Jachmann の見解が、あるいは「古代世界から生き残ったもっとも難解な詩であろう」という Berg の感想が、大方の共感を得ているのも、もっともである⁽¹⁾。そのために、この詩集、あるいはその各編をめぐる謎解きは実にさまざまで、各人各様の解釈を試みている。しかしそれらを整理すれば、次のような大凡の分類が可能である。

- 1) アレゴリー説、仮面劇説、賛辞説、宣伝文学説
- 2) 模倣説（模倣批判と模倣価値説）
- 3) アルカディア説、ユートピア説、黄金時代説、田園賛歌説、エピク로스主義説、非現実説、逃避説
- 4) 脱牧歌説、反牧歌説
- 5) 詩論説、牧歌論説

この多様性は、この詩集がそれだけ多様な要素を含み、多様な性格を併せ持っていることにもよるが、それだけではない。文学作品の解釈もまた、文学作品そのものと同様に、解釈者の生きている時代の歴史的状況とその人自身の民族的個人的エートスに左右されるものであるからである。だから18世紀には宮廷文学として読まれ、19世紀には自然主義の立場から批判され、20世紀にはポスト・モダニズムとか、ポスト・ベトナムの色彩の濃厚な解釈が流行するのであり、また、ドイツの学者は精神主義を、英米の研究者はアイロニーを感じ取るのである。どの説にもそれなりの根拠と存在理由があって、一概に否定し去

ることはできない。かといって、どの解釈もそれだけで十分であるとは言い難い。

ここではそのすべてに触れることはできないが、第2歌の解釈を中心に、詩集全体に対する解釈も自由に織り混せて、主なものを概観してみたい。

第2歌のテーマは、「美少年のアレクシスに対する牧人コリュドーンの恋」で、初めに、この牧人が絶望的な恋の悩みを孤独な歌に託している状況が、5行の導入部で説明され、あとの68行はもっぱらコリュドーンの歌に充てられている。この導入部を歌うのがウェルギリウス自身ではなく、他の登場人物（牧人）たちと同じように、ウェルギリウスが創造した登場人物であるという説もあって⁽²⁾、他の詩（例えば第6歌）の「語り」の部分から見て、それもあり得ることであるが、ここではまだこの問題には立ち入らないことにする。

2. アレゴリー

『詩選』をアレゴリーと解する古代に流行した読み方は、その後も廃れることなく続いて、今でも時々試みられる、実に息の長い解釈である。ここで言うアレゴリーとは、登場人物（事物）が現実のウェルギリウスを取り巻く政界や詩壇の誰か（何か）を指すという意味、実在の人間が牧人の仮面をかぶって登場するという意味である。しかし、ウェルギリウスの親友で、『詩選』の最初の証言者となったホラーティウスとプロペルティウスが、アレゴリーらしきことを何も言っていないから⁽³⁾、本当の所は、ウェルギリウス自身にもその意図がなかっただろうと思われる。にもかかわらず、テオクリトス第7歌のシーミキダースを作者自身の偽名ないし仮面と取ることが容易であることから、牧歌のジャンルには初めからアレゴリーの可能性がつきまとっていた。『詩選』についても、早くからアレゴリー解釈が始まったと伝えられ⁽⁴⁾、実際にネローの時代のカルプルニウス・シクルスの牧歌は、ウェルギリウス牧歌をアレゴリー的に解釈してそれを模倣したものである。以後、エピグラム詩人のマールティアリス、散文作家のアープレイウス、伝記作家のスウェートーニウス、さらに学者のドナートゥスやセルウィウスなど、いずれもアレゴリー解釈を取っている⁽⁵⁾。

第2歌のアレクシスについて、セルウィウスは古代に流布していたいろいろな説を上げているが、その1つは、「アレクシスはボルリオーの所有していた美少年アレクサンデルで、ウェルギリウスがそれを愛して、譲り受けた」とい

う説である。若干の異同はあるけれども、アーブレイウス、スウェートーニウス＝ドナートゥス、マールティアリスもほぼ同じことを言っているから、これが最も流布した、普通の解釈だったのであろう。近世になっても、19世紀に Ribbeck が否定するまで、一般にこの説が信じられていた⁽⁶⁾。

セルウィウスの伝えるもう1つの説によると、アレクシスはオクターウィアーヌスである。古代のアレゴリー解釈の総集編とも言える Scholia Bernensia はこれについて、ウエルギリウスがオクターウィアーヌスの好意を求めたものであるとして、その上でアレゴリーの体系化を試みている⁽⁷⁾。それによれば、「コリュドーンはウエルギリウス、アレクシスはオクターウィアーヌス、メナルカースはアントーニウス、ダプニスはポリオー、ダーモエタースはテオクリトス、アミュンタースはコルニフィキウス、2匹のノロシカの子は『農耕詩』のうちの2巻、または『農耕詩』と『アエネーイス』、テストュリスはクレオパトラ、アマリユルリスはローマである、云々」ということになる。この説は中世に普及していたらしく、近世初頭にも受け入れられた⁽⁸⁾。

Coleiro は現代のいろいろなアレゴリー説を紹介している⁽⁹⁾。アレクシスはコルネーリウス・ガルルスであるとする Vive の説、アレクシスは都会の若い人で、田舎に関心を持たないので、ウエルギリウスがそれに答えたものであるとする Glaser の説、この詩は財産を失ったマントゥアの人たちのためにオクターウィアーヌスにあてた請願書であるとする Martin の説、コリュドーンの絶望的な恋は回復不可能な所有地に対するウエルギリウスの絶望的な切望であるとする De Witt の説などである。Coleiro 自身は、前42年の立退きの際に、時の知事のポリオーがウエルギリウスの土地も接収されることになると予想して、ローマへ上って詩人として名を挙げることが勧めたと考えて、「コリュドーンはウエルギリウスを招くローマ、アレクシスはウエルギリウス、アレクシスの主人は、ウエルギリウスを縛りつけているマントゥア、また、ダーモエタースは文学的優位をすでにローマに譲ったギリシアで、アミュンタースは北イタリアの劣っている詩人たちの一人である」としている。また Savage は、v. 35-39 の3人の詩人について、「ダーモエタースはアエミリウス・マケル、コリュドーンはドミティウス・マールスス、アミュンタースはアルビウス・ティブルルスである」とし、さらに「アレクシスは恐らくセクストゥス・ポンペイウス、アマリユルリスはマルクス・アントーニウスである」と考えている⁽¹⁰⁾。

3. 体験と創作

以上のようなアレゴリー解釈は全く荒唐無稽であるかもしれないが、少なくとも一つの問題を提起している。それは、この『詩選』第2歌がウェルギリウスの実際の体験を反映しているのかどうか、という体験と創作の関係の問題である。政治的状況、政治家との関係、土地接收の問題、詩壇や詩人仲間との関係などを第2歌から読み取ろうとする解釈は、いかにも眉唾物であって、無視してしまっても構わないだろうけれども、古代の解釈の主流を占めていた恋愛については、一応問題を解決しておかなければなるまい。ウェルギリウスはほんとうに自己の恋愛体験を、それも美少年に対する同性愛の体験を、この詩に歌っているのだろうか。

アレクサンデル少年に恋をしたというような実話をそのまま信じる人は、もう誰もいないだろうけれども、恋愛経験なしにはこれだけの詩は書けないと考える人は、最近まで少なくなかった。Cartault は、実際に誰かを愛してこの詩を作ったという Glaser の19世紀的な考えを否定して⁽¹¹⁾、今世紀の研究者たちに新しい方向づけを与えたが、しかしそれでも、「彼は自分の本性の中に、自分自身の感情の中に、恋の嘆きの秘密を見出す」と述べて、まだわずかながら体験にこだわっている⁽¹²⁾。Kappelmacher は、「彼はかつて少年を愛し、それについて語っている。この詩には、彼の自己体験が入っている。彼は、それを克服し、今、解放されたことを物語っている」と述べているが⁽¹³⁾、このように具体的体験を読み取ろうとするのは、Kappelmacher あたりが最後であろうか、以後、すっかり下火になり、Coleiro のアレゴリー説は例外的である。それでも Cartault と同じような考えは今も根強く残っている。

しかしながら仮に自らは恋に苦しんだ経験が一度もなかったとしても、それでも恋の苦しみに関心を抱き、同情を感じ、ヘレニズム期に大流行した恋愛文学を愛読して、そこから多くのことを学習し、さらにイマジネーションを働かせるならば、ウェルギリウスほどの才能の詩人にはこれくらいの恋愛心理の描写は不可能ではない。時は、体験しないことでもあたかも体験したかのように上手に話す技術を開発し、教育する、修辞学の全盛時代であったし、また、詩人はすべて *doctus poeta* だったのであるから、現実生活の体験の有無は大した問題ではない。むしろ学習とイマジネーション、すなわち模倣と独創の関係の方が重要である。

4. 模倣と独創

Norden は、「原作と密着しているところでは、ほとんどいつも原作の持つ微妙な陰影を出しそこない、彼が案出したものでは、それによってしばしば登場人物のエートスを台無しにしている」と述べて、模倣にも、模倣と独創の結合にも、ウエルギリウスは失敗したと批判している⁽¹⁴⁾。恐らくこれが前世紀の一般的見解の一つの代表であろう。

しかし他方では、同じ世紀に、Eichhoff, Gebauer, Cartault, Jahn などによって、模倣と独創の関係の体系的研究が進められた⁽¹⁵⁾。ただ、彼らは依然として比較の対象をテオクリトスに限り、テオクリトスに対応しないものはすべてウエルギリウスの独創とみなした。例えば Cartault は、ウエルギリウスがテオクリトスの様々な詩から切り取ったモチーフを組合せたために、異質な起源の跡を消し切れずに、不調和、不統一の感を残したと批判する一方で、動植物や田舎の風物の選択と描写が彼自身の観察に基づくこと、テオクリトスのアイロニーを消して真面目な詩にしたこと、そのためのテオクリトスのモチーフの改変、文体のエレガンスと巧妙な技法などに、ウエルギリウスの独自性を見ている⁽¹⁶⁾。

今世紀に入って、Hubaux もまた、田舎と牧人の観察、風景への感性、田舎の色々なものの価値への感覚に、ウエルギリウスの独自性を認め、これをウエルギリウスのリアリズムと呼んでいる⁽¹⁷⁾。しかし一方では従来の研究者がほとんどテオクリトスとしか比較していないことを批判して、見かけの独創性の陰に隠れている他のモデルを探す必要を説き、メレアグロスの多くのエピグラムからの借用を指摘した⁽¹⁸⁾。それによれば、アレクシスの名を初めとして、ウエルギリウスの独創と考えられてきたことのかかなり多くが、メレアグロスのエピグラムの模倣である。

Hubaux の研究によって掘げられた模倣の対象の枠は、その後ますます拡大される。Pfeiffer は、メレアグロス以外のエピグラム、モスコス、イーピュコス、ステーシコロス、パノクレース、テオグニスなどと比較し⁽¹⁹⁾、Klingner は、テオクリトスよりもむしろその後継者たちの牧歌との関係の方が深いことを指摘し⁽²⁰⁾、Holtorf は哲学の影響も挙げている⁽²¹⁾。他方、テオクリトスとの比較研究も、Rohde, Kappelmacher, Posch, Garson, Robertson などによって精力的に進められた⁽²²⁾。

これらの研究を集大成しながら、独自の模倣論（＝独創論）を確立して、この詩に関する模倣論にいわば終止符を打ったのが、Du Quesnay である⁽²³⁾。彼によれば、この詩はテオクリトスの模倣であるからこそ、当時のローマで価値があったのであり、ギリシア詩人の大業績に匹敵するものを作ることは、それだけですでに独創的なことであり、伝統を新しい材料によって拡大する創造的活動である。特に彼は generic pattern に注目し、テオクリトスの用いた komos と renuntiatio amoris（あるいは remedia amoris）のいろいろな topoi の巧みな variation とその活用、あるいはまたエピグラム、エレゲイア、叙情詩など様々な形式の恋愛詩の conventional formula の巧妙な利用を洗い出して、ウェルギリウスがテオクリトスをいかに改変ないし逆転させたかを証明する。彼は、アルカイック期の叙情詩からヘレニズム詩までの全伝統をウェルギリウスが利用して、それを入念に仕上げた点を指摘するだけでなく、失われた詩を利用した可能性まで考えている。その1つは、『ダブニスとクロエー』の一箇所との著しい類似から、共通の source として Philetas を想定したこと、もう1つは、推定されていた Gallus の影響を、多数の状況証拠からはほとんど確定的にしたことである。彼によって模倣の範囲が最大限に拡張され、また模倣の積極的な意味と価値が明らかにされた現在、もはや模倣を問題にする意味はなくなったと言える。

5. 精神の領域としてのアルカディア

第2歌について、模倣の具体的な解明と平行して、独自性の認識も進んでいる。Cartault はまだ、不幸な恋を描く才能、田舎の生活への気さくな愛、高雅な文体などに言及しているだけであるが⁽²⁴⁾、Rohde は⁽²⁵⁾、一直線に頂点に向かって上昇しそこから下降する明晰な構成と、それに合わせて増大し減少する感情が、テオクリトスの無秩序な構成と平板な感情に比べて、ウェルギリウスの特徴であるとしている。特に彼は、感情の激烈、崇高、壮大、高貴な点を強調する。本来喜劇的だった牧歌をウェルギリウスが悲劇の崇高さにまで高めたことを主張したのは、Rohde の功績である。Klingner も、Rohde の説を若干修正した上で、上昇と下降の明晰な古典的均斉、感情の悲愴性、純粋な魂の神的価値、牧歌領域の荘厳さを指摘して、「他の牧歌詩人が表面的に扱ったものを本質的にまで深めた」と述べている⁽²⁶⁾。La Penna はこの Rohde と Klingner の考えに批判的で、全体としてエレゲイアのコンヴェンションを越

えず、叙情的活力は弱いと見ているが、それでもコリュドーンの歌の冒頭と終り近くの、恋をする男の絶望と孤独に対して、一方では息苦しさと疲労感に満ちた空漠たる風景が共鳴し、他方では調和と静けさに満ちた外界が対照をなすことによって、孤独と絶望のバトスを強調している点にウエルギリウスの独自性を指摘している⁽²⁷⁾。

精神性の深さを読み取る点では、Snell のアルカディア論が卓越している。Snell の見解を概括すれば、次のようになる⁽²⁸⁾。「ウエルギリウスのアルカディア的牧人は、精神的で、情感豊かで、繊細で、心のこもった人間であり、『詩選』はギリシア古典期の真剣さ、有意性、悲愴性、構成美、自律性、厳しさ、偉大さへの回帰の傾向を示す。詩人は暗い世から憧憬的に逃れて、粗野な現実の彼方に牧歌的平和を、黄金時代の夢を、神話と現実の中間の地を求める。アルカディアは詩的幻想の世界であり、日常的な物的世界から分離した、精神と芸術と詩歌の国である。ギリシア的なモチーフは、現実との関連を失って、意味だけが残って、アレゴリーとなり、芸術は象徴の領域になる。」

Büchner は、Snell の説くところを認めた上で、「牧歌はウエルギリウスの心の象徴であり、純粋な内面性が詩的なものの領域に高められたものである」と、簡潔に述べている⁽²⁹⁾。

6. 逃避と理想

Highet によれば、ウエルギリウスの牧歌は、「残酷な現実から、自然の美しさと、ギリシア的想像力の優雅さと、新しく開拓されたラテン語の詩の文体の魅力と、空想的夢幻の愉悦との理想的混合体への逃避の詩である。」⁽³⁰⁾ この解釈は広く普及しており、Snell も、結局のところ、アルカディアを現実世界からの逃避の場所と考えていると言える。Commager は、「牧歌は想像の世界を事実の世界に置き換える試みで、ウエルギリウスは現実からの唯一の真の逃走を詩の世界に求めた」と述べ⁽³¹⁾、Quinn は、「カエサル暗殺に続く暗い苦痛の時代の耐えがたいローマの現実から芸術の中への逃避を描いている」と説明している⁽³²⁾。

しかし逃避はネガティブな概念であるから、それには言及せず、あるいはそれを否定して、むしろ理想世界の詩的創造を強調する傾向も見られる。Burck は、『詩選』の牧歌世界はそれだけで完結している世界で、その隔絶された静けさの中には、人間の営み、心配、権力、名誉欲、死、破滅、身分や財産に基

づく差別が存在しない。それは黄金時代と同様に、根源に近く、人間と歴史の混乱に汚染されていない。歌の芸術が牧人たちの世界と生活に理想的な高めと内面的な価値を与える」と述べて、逃避には触れずに、専ら理想性を強調している⁽³³⁾。Büchner の「心の憧憬が芸術の領域に形を成した」という『詩選』の定義は、前節で見たように、Snell の説に一致するが、しかし彼は逃避を否定している⁽³⁴⁾。Buchheit は、「風景は初めから詩人の風景、救済の風景として開拓された」と述べている限りでは、Snell の説の延長上にあるように見えるが、しかし、「アルカディアへの逃避など、初期の詩選についてさえ言えない」と述べて、逃避説とアルカディア説を共に否定している⁽³⁵⁾。

7. アイロニー

上述の Rohde の悲劇的崇高性の説は、詩人の側のアイロニーと登場人物の滑稽さを否定するものである。すでに Cartault が、「ウェルギリウスはテオクリトスのアイロニーから悲愴さを作った。コリュドーンは感動的であり、滑稽ではない」と考えている⁽³⁶⁾。Klingner は、「ウェルギリウスは内面的に牧人たちと、その世界から決して離れず、むしろそれを彼の心の中で鳴っている内的音楽を奏するための楽器に利用している」と語っている⁽³⁷⁾。さらにまた Büchner は、「ウェルギリウスは不幸な恋をする男の悲劇から自分を引き離さず、むしろ関与し、読者にもこの心理ドラマに同じように関与させる」と述べるとともに、「ウェルギリウスの心が認識を得ようと求め、模範的であろうと欲して、自らの高貴さと豊かさを伝えるから、距離はなく、深い共苦と共歓がある」としている⁽³⁸⁾。

このように、「ウェルギリウスは基本的に真面目で、距離を置かず、深い共感をもって描き、テオクリトスのように超越的な位置からアイロニーの目で見下ろしているのではない」と考える論者は、ほかに Holtorf, Otis, Garson, Berg, Coleiro, Alpers など、きわめて多数で、Snell も、もちろんこれに含まれる⁽³⁹⁾。

これに対して、Rose, Galinsky, Wormell などが、ホラーティウスの *molle atque facetum* という批評や、アープレイウスの *bucolicum ludicrum* という言葉に注意を喚起して、「あまり真面目に取ってはならない」と警告している⁽⁴⁰⁾。Robertson は、「コリュドーンは必ずしも Klingner や Otis が言うように悲劇的ではない」と述べて、詩人のユーモアとコリュドーンの滑稽さ

を指摘しながら、パトスとユーモアの共存を認めている⁽⁴¹⁾。Coleman も大体同じ考えである⁽⁴²⁾。

それでもこれらの研究者は、ユーモアを認めながらも、本質的な真面目さを否定していない。これに対して Moore-Blunt は、コリュドーンが本質的に滑稽な人物であることを証明しようとして、その証拠になる箇所をいろいろと挙げている⁽⁴³⁾。しかし Du Quesnay は、「滑稽面を強調しすぎてはならない」と諫め、「真面目さと穏やかなユーモアがどちらも存在し、相互に排他的ではない」としている⁽⁴⁴⁾。このあたりが妥当な考えであろう。「笑いながら真実を語る」というホラーティウスの風刺詩の定義は⁽⁴⁵⁾、ウエルギリウスの牧歌にもあてはまる。

8. 反 牧 歌

英語圏を中心にして60年代から、理想主義的解釈を疑問視する新解釈が唱えられ始めた。そのきっかけを作ったのは、恐らく『アエネーイス』についての Adam Parry 二声説で⁽⁴⁶⁾、それがやがて牧歌の解釈にも波及したものであろう。Boyle によれば、『詩選』は、「当時の人々の情緒的・知的・倫理的な《脱白》》について瞑想する詩、残忍な歴史的事実と精神の貧困化を探求し、詩歌の無力を言明する詩であり、牧歌世界は精神的楽園ではなく、苛酷な現実の象徴であって、平和や愛や友情や、喜びや同情や無邪気や、詩の効力や精神の平穏や人間と自然の調和などの理想的価値が実現しない失楽園である」という⁽⁴⁷⁾。これは牧歌否定説、あるいは反牧歌説である。Reach の牧歌世界の定義、ないしその範囲は、通常のそれとは異なるが、それでもそれが結局は失楽園であるとする点は、やはり反牧歌説である⁽⁴⁸⁾。また、Putnam によれば、ウエルギリウスにとって牧歌は、「想像の生活」と「経験を秩序だてる自由の探求」であり、その目的は、《想像力の生活が失われているローマで、何が危なくなっているか、もし仮に「牧歌」と権力、詩歌と歴史という対立する二つの概念が調和して生きるとしたら、何が得られるか、社会と自然の関係は何か、秩序を押しつける諸制度と、自由と道德性の象徴としての風景との関係は何か》を示すことであるという⁽⁴⁹⁾。最近では Lee が、「ウエルギリウスはユートピアンではない真のアルカディアンであって、人間の本性を完全なものとするユートピアの夢ではなく、人間性が本源的に《ひび割れ》しているアルカディアの秘密を見た。アルカディアンは人間の諸問題に永続的な答がないこと、しかし

善と悪への潜在能力を自覚することが彼の諸問題を正しい均衡に保つことを知っている」と述べて、Alpers の suspension という考えによく似た ambivalence という考えを提起している⁽⁵⁰⁾。

牧歌の人間が「脱臼」し、「ひび割れ」している。このような新解釈によって『詩選』のユートピア的理想が否定されているときに、それでもなお、「それは反牧歌でも、脱牧歌でもなく、依然として牧歌である」と主張するためには、Ernst A. Schmidt のように、古代のすべての牧歌に共通するこのジャンルの外形的特徴を数え上げるだけでは十分ではない⁽⁵¹⁾。牧歌の定義そのものを変えなければならない。

9. 新しい牧歌

ウェルギリウスは、時代と自己の抱える問題を考えるための器として、牧歌を利用した。彼の牧歌は現実を映す鏡である。彼のテーマは、苛酷な現実から夢のアルカディア世界への逃避ではなく、戦争と政治と文明が自由と平和と幸福を破壊している現実問題そのものである。時代の危機を反映して、詩人の心は、平和と安定に対する期待と絶望の間で、アウグストゥスとローマに対する信頼と疑念の間で、人類の未来に対する希望と不安の間で、激しく動揺し、それが牧歌世界と牧人たちの歌を通して表現される。ウェルギリウスの牧歌は、「危機の世界の牧歌」である。彼は、現実世界の危機を象徴的に牧歌に託して描いた。だから、彼の牧歌世界はつねに危機に直面している。人類は、危機を乗り越えて、平和を達成するか、それとも破滅するかと、彼は当時の読者にも、2000年後の我々にも問いかけている。だからそれは逃避の文学ではなく、参加 (engagement) の文学である。

さらにまた、それらの外的暴力と同じように、内部から人間性を破壊して、自由と平和と幸福を奪う不可抗的な情念の問題もある。また、人間がそのような内外の破壊の危険にさらされている状況下での、詩人の役割、文学の可能性と意味とあり方の問題もある。

これらの問題を考察するのに、ウェルギリウスは牧歌の枠組みを用いた。その結果、一方では牧歌の理想に照らして現実の問題が鮮やかに浮かび上がるけれども、他方では牧歌のジャンルに特有な、控えめで穏やかな表現法によって、憂慮と疑念を、ホラーティウスのように明示するのではなく、希望と信頼の表現の下にそっと隠す結果になった。これが誤解を生むそもその原因となっ

たのである。彼は内乱世代の不安とペシミズムを、アルカディアと古典主義の二重のヴェールで覆い隠している。このヴェール、ないしヴェールをかける行為に詩人の真意を読み取るべきなのか（逃避説）、それともヴェールを剥がして、詩人の本心を裸にすべきなのか（反牧歌説）、それによって解釈が大きく二つに分かれているのである。

もっとも、詩人が牧歌に取り組むことを考えた最初の時点では、おそらくその動機は別にあっただろうと推測される。その一つは、言うまでもなく、テオクリトスの牧歌が彼の心の琴線に触れたことであるが（アシニウス・ポリオーの勧めがあったことは⁽⁵²⁾、それほど重要ではない）、しかしそれだけではあるまい。Neotericiの一人として、彼もまたヘレニズム文学のジャンルの一つをラテン文学に取り入れて、そのジャンルのローマにおける創始者、および第一人者になることに、意欲と意義を感じたはずである。

しかし彼は、ヘレニズム文学の単なるラテン語化にも、ヘレニズム的な「芸術のための芸術」にも、満足できなかった。すでに最初の作から、恋愛の情念にテオクリトスとは異なる色合と意味とを与えて、独自性を発揮しているが、やがて、恋と死と文学にテーマを限定する牧歌のしきたりを超えて、ローマ世界が抱えるさまざまな問題、政治的社会的問題、戦争と平和の問題への彼の自身の関心を詩に織り込む欲求を抑えることができなくなる。この時点で彼はNeotericからAugustanに脱皮し、彼の牧歌世界は急速に拡大する。この拡大を破壊とみなして、「反牧歌」と呼ぶことも可能である。同じようにカトゥルルスのエピグラムは、最後に「反エピグラム」になり、ホラーティウスの風刺詩は、最後に「反風刺詩」になった。内容が形式を破裂させるのは、前1世紀のローマの詩人たちに共通の現象である。だから、脱牧歌、反牧歌と呼ぶことも間違いではない。が、筆者はむしろこれを、拡大し、変容した牧歌世界を描く「新しい牧歌」と呼びたい。つまり、視野を拡げ、テーマを変えて、全く新しくなったけれども、依然として牧歌であって、反牧歌ではない、と考えたい。たしかに、牧人の視点から見れば、平和の理想郷に現実世界の混乱と苦悩が入り込んできて、夢を破壊したことになるが、詩人の側に立って見れば、詩人自身が自己の内的欲求に従って、現実世界の問題を牧歌世界の中に取り込んだのである。

これは決して新しい見方ではなく、KlingnerとBüchnerが説いているところと大差ない⁽⁵³⁾。「アルカディアは罪と苦しみで満ちた世界の事件の呪いからの避難所で、歴史の領域に対置されているが、詩人はこの外の世界にも生き

ているのであり、体験するすべてが牧歌に反映するように、彼が苦しみ耐えている歴史もまた反映する。アルカディア小世界全体が、世界一般のより高貴な写像として、一つの歴史的世界になる」(Klingner)；「彼の詩は、論争であり、告白であり、認識であって、それが登場人物たちの中に、あるいは夢想的なだけではない幻想の適切な形象の中に具現され、従って美しい。プラトーン的なものは、現実と全く異なる世界への逃避の中にはなく、美と認識の結婚の中に存し、その妥当性は、それが豊かな、深い、苦悩する、しかし信念をもって断固としている心に基づいていることによる。ウェルギリウスの詩は、自ら創り出した、しかしまた材料に結びつけられている世界の中で実現する調和であり、それゆえに現実全体の象徴である」(Büchner)

詩集全体についてはもちろんのこと、第2歌だけに問題を絞っても、以上の他にまだまだ多くの問題が残っている。たとえば、1) 詩人はなぜテオクリトスに従わず、メレアグロスに倣って、恋人を女性から少年に変えたのか、2) コリュドーンの歌は、詩人が(あるいは導入部を歌う牧歌歌手が)批判しているように、本当に「出来の悪い歌」であるのか、3) コリュドーンは最後に恋の苦しみから解放されるのか、また、4) 彼は、Leach が考えるように⁽⁵⁴⁾、牧歌世界から現実世界へ戻るのか、それとも牧歌世界に復帰するのか、5) 第44—55行は、Skutsch が主張するように⁽⁵⁵⁾、改訂の時に挿入したものか、6) そもそもこれは恋愛詩なのか、それともやはり牧歌なのか、というような難問がそれである。次回第2部(本論)では、第2歌の個々の箇所を検討しながら、同時にこれらの問題も扱う予定である。

注

- (1) Jachmann, Günther: "Die dichterische Technik in Vergils Bukolika," *Neue Jahrbücher*, 25 (1922) 101-120: p. 101. / Berg, William: *Early Virgil*, London 1974, p. vii.
- (2) Leach, Eleanor Winsor: *Vergil's Eclogues: Landscapes of Experience*, Ithaca/London 1974, p. 245-273.
- (3) Hor. *Sat.* I 10, 44-45; Prop. *El.* II 34, 61-80.
- (4) Servius (ad 4, 11) によれば、Pollio の息子の Gallus が、「詩選第4歌は自分のために作られたもの」と言っているのを聞いたと、Asconius Pedianus が伝えているということである。
- (5) Mart. 8, 56, 6f. は Alexis を Maecenas からの贈り物とするアナクロニズムを犯している。Apul. *Apolog.* c. 10 は Alexis を Pollio の奴隷とし、Suet.=

- Donat. 9 は, Alexis の本名は Alexander で, Pollio から Vergilius に贈られたとしている。
- (6) Cf. Coleiro, Edward: *An Introduction to Vergil's Bucolics with a Critical Edition of the Text*, Amsterdam 1979, p. 135f. / Cartault, A.: *Étude sur les Bucoliques de Virgile*, Paris 1897, p. 103f. / Hubaux, Jean: *Le réalisme dans les Bucoliques de Virgile*, Liège/Paris 1927, p. 40-44.
- (7) *Scholia Bernensia ad Vergili Bucolica atque Georgica*, ed. Hagen, Leipzig 1867, p. 87-94.
- (8) Cf. Coleiro (n. 6) p. 136; Cartault (n. 6) p. 105f.; Hubaux (n. 6) p. 42f.
- (9) Coleiro (n. 6) p. 138-141.
- (10) Savage, John J. H.: "The Art of the Second Eclogue of Vergil," *TAPhA* 91 (1960) 353-375: p. 353-365.
- (11) Cartault (n. 6) p. 105.
- (12) Cartault (n. 6) p. 84.
- (13) Kappelmacher, Alfred: "Vergil und Theokrit," *WS* 47 (1929) 87-101: p. 100.
- (14) Norden, Eduard: *Die römische Literatur*, Leipzig 1961⁶, p. 60.
- (15) Cf. Hubaux (n. 6) p. 18-21.
- (16) Cartault (n. 6) p. 88-103.
- (17) Hubaux (n. 6) p. 15.
- (18) Hubaux (n. 6) p. 46-80.
- (19) Pfeiffer, Erwin: *Virgil's Bukolika: Untersuchungen zum Formproblem*, Stuttgart 1933, p. 13-28.
- (20) Klingner, Friedrich: "Virgil: Griechische Einflüsse," *Fondation Hardt, Entretiens* 2 (1956) = *Studien zur griechischen und römischen Literatur*, Zürich/Stuttgart 1964, 278-295: p. 281.
- (21) Holtorf, Herbert, hrsg. u. erkl.: *P. Vergilius Maro: Die größeren Gedichte, I: Einleitung, Bucolica*, Freiburg/München 1959: p. 140f.
- (22) Rohde, Georg: *De Vergili eclogarum forma et indole*, Berlin 1925, p. 8-40. /Kappelmacher (n. 13) p. 88-101. /Posch, Sebastian: *Beobachtungen zur Theokritnachahmung bei Vergil*, Innsbruck/München 1969, p. 33-53. /Garson, R. W.: "Theocritean Elements in Virgil's Eclogues," *CQ* 21 (1971) 188-203: p. 188-192. /Robertson, F.: "Virgil and Theocritus: Text of a Lecture Read to the Virgil Society, 16th January, 1971," *Proceedings of the Virgil Society* 10 (1970-71) 8-23.
- (23) Du Quesnay, Ian M. Le M.: "From Polyphemus to Corydon: Virgil, Eclogue 2 and the Idylls of Theocritus," *Creative Imitation and Latin Literature*, ed. by David West and Tony Woodman, Cambridge 1979, 35-69.
- (24) Cartault (n. 6) p. 84; 85; 93; 103.
- (25) Rohde (n. 22) p. 8-11; 32-40.
- (26) Klingner, Friedrich: "Rezension: G. Rohde, De Vergili eclogarum forma et indole," *Gnomon* 3 (1927) 576-583 = Id.: *Studien* (n. 20) 246-252: p. 247-

250. /Id.: "Virgil: Griechische Einflüsse," *Studien* (n. 20) p. 283-284. /Id.: "Virgil: Wiederentdeckung eines Dichters," *Das Neue Bild der Antike*, Leipzig 1942, Bd. 2, 219-245 = Id.: *Römische Geisteswelt*, München 1961⁴, 239-273: p. 265.
- (27) La Penna, Antonio: "La seconda ecloga e la poesia bucolica di Virgilio," *Maia* 15 (1963) 484-492.
- (28) Snell, Bruno: *Die Entdeckung des Geistes: Studien zur Entstehung des europäischen Denkens bei den Griechen*, Hamburg 1946; 233-258 (= "Arkadien, die Entdeckung einer geistigen Landschaft")
- (29) Büchner, Karl: *Humanitas Romana: Studien über Werke und Wesen der Römer*, Heidelberg 1957, p. 152.
- (30) Highet, Gilbert: *Poets in a Landscape*, New York 1957, p. 54.
- (31) Commager, Steele, ed.: *Virgil: A Collection of Critical Essays*, Englewood Cliffs (N. J.) 1966, p. 2.
- (32) Quinn, Kenneth: "Die persönliche Dichtung der Klassik," *Römische Literatur*, hrsg. von M. Fuhrmann, Frankfurt a. M. 1974, 209-250: p. 224.
- (33) Burck, Erich: "Die Rolle des Dichters und der Gesellschaft in der augusteischen Dichtung," *Antike und Abendland* 21 (1975) 12-35: p. 19.
- (34) Büchner, Karl: *P. Vergilius Maro, der Dichter der Römer*, Stuttgart 1961 (Sonderdruck aus Pauly-Wissowa, Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft, VIII A 1, 1958 <1955> 1021ff.), Sp. 243.
- (35) Buchheit, Vinzenz: *Der Anspruch des Dichters in Vergils Georgika: Dichtertum und Heilweg*, Darmstadt 1972, p. 16.
- (36) Cartault (n. 6) p. 89.
- (37) Klingner, Friedrich: "Die Einheit des Virgilischen Lebenswerkes," *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts: Römische Abteilung*, Bd. 45 (1930) 43-58 = *Römische Geisteswelt* (n. 26) 274-292: p. 276.
- (38) Büchner (n. 34) Sp. 170; 239.
- (39) Holtorf (n. 21) p. 139f. /Otis, Brooks: *Virgil: A Study in Civilized Poetry*, Oxford 1963, p. 121-124. /Garson (n. 22) p. 188-189. /Berg (n. 1) p. 114. /Coleiro (n. 6) p. 142. /Alpers, Paul: *The Singer of the Eclogues: A Study of Vergilian Pastoral*, Berkeley/Los Angeles/London 1979, p. 121. /Snell (n. 28) p. 239-240.
- (40) Rose, H. J.: *The Eclogues of Vergil*, Berkeley/Los Angeles 1942, p. 24-25. /Galinsky, G. Karl: "Vergil's Second Eclogue: Its Theme and Relation to the Eclogue Book," *Classica et Medaevialia* 26 (1965) 161-191: p. 163. /Wormell, D. E. W.: "The Originality of the Eclogues: sic parvis componere magna solebam," *Virgil (Studies in Latin Literature and its Influence)*, ed. by D. R. Dudley, London 1969, 1-26: p. 7-8.
- (41) Robertson (n. 22) p. 13; 23.
- (42) Coleman, Robert: "Vergil's Pastoral Modes," *Ancient Pastoral: Ramus Essays on Greek and Roman Pastoral Poetry*, ed. by A. J. Boyle, Berwick

- (Victoria) 1975, 58-80: p. 63.
- (43) Moore-Blunt, Jennifer: "Eclogue 2: Virgil's Utilization of Theocritean Motifs," *Eranos* 75 (1977) 23-42.
- (44) Du Quesnay (n. 23) p. 41.
- (45) Hor. *Sat.* I 1, 24.
- (46) Parry, Adam: "The Two Voices of Virgil's Aeneid," *Arion* 2-4 (1963) 66-80.
- (47) Boyle, A. J.: *The Eclogues of Virgil: Translation with Introduction, Notes and Latin Text*, Melbourne 1976, 16-20.
- (48) Leach, Eleanor Winsor: "Nature and Art in Virgil's Second Eclogue," *AJPh* 87 (1966) 427-445: p. 440-445. /Id.: *Virgil's Eclogues, Landscapes of Experience* (n. 2) p. 30; 146-152.
- (49) Putnam, Michael C. J.: *Virgil's Pastoral Art: Studies in the Eclogues*, Princeton 1970, p. 8-10.
- (50) Lee, M. Owen: *Death and Rebirth in Virgil's Arcadia*, Albany (N. Y.) 1989, p. 111-112. /Alpers (n. 39) *passim*.
- (51) Schmidt, Ernst A.: *Poetische Reflexion: Vergils Bukolik*, München 1972, p. 9-57.
- (52) "Vita Servii" (In: *Vitae Vergilianae Antiquae*, ed. C. Hardie, Oxford 1966) 24. /Cf. Du Quesnay (n. 23) p. 35.
- (53) Klingner, Friedrich: "Virgil und die geschichtliche Welt" (1943): *Römische Geisteswelt*⁴ (n. 26) 293-311: p. 300f. /Büchner (n. 34=RE) Sp. 242f.
- (54) Leach (n.2) p. 25-50.
- (55) Skutsch, Otto: "The Original Form of the Second Eclogue," *HSCP* 76 (1970) 95-99.